

自分を笑い飛ばすゆとりを

自分に対して厳しく見つめる目を持つこと。文章を書く上で、欠かせない条件の一つです。今回は、自らの愚かさ、至らなさまで冷静に見つめ、それを笑い飛ばすユーモア、遊びの精神について、ご紹介いただきました。

作家、北杜夫は熱烈な阪神ファンだった。テレビに出演した時、ため息まじりにこんなことをいつていた。「いいところまでいつて阪神が惜しくも負けますとね、私はもうハンシンハンシヨウですわ」

他愛のない話だが、北杜夫が、野球に熱狂する自分を笑い飛ばしているところがいい。こんな話を聴くとなにか得をした気になる。

昔の話だ。園遊会の最中、昭和天皇が、ロス五輪で金メダルをとった柔道の山下泰裕選手に声をかけた。「柔道はすいぶん骨が折れますか?」。山下が直立不動で答えた。「はい、私は二年前にも骨を折りました」。

テレビを見ていて、思わず吹き出した人も多かったはずだ。笑いを意図したわけではない会話だけに、いつそうおかしかった。

俵万智が三十一文字の世界で脚光を浴びはじめたころ、『サラダ記念日』を読んで思ったのは、この人の「自分を笑い飛ばす」軽やかさだった。たとえば、

『嫁さんになれよ』だなんてカンチューハイ二本で言ってしまったいいの」

という歌にも、あるいは「梅雨晴れのちりがみ交換 思い出もポ

ケットティッシュに換えてくれんか」

という歌にも、自分の身の辺のできごとや複雑な心情を笑いに包む心意気があって私は好きだ。

文章では、俳優、小沢昭一の書くものもいい。戦時中、まだ十代だった小沢は海軍兵学科予科にいた。こんな文章がある。

「もう毎日毎日家に帰りたくて泣いていた。だらしない、ダメな人間で、(中略)病気で寝ているおやじを思い、おふくろを思い、泣いていた。そういう状況だから、裏山へ逃げて、藪の中なんかで独りしていると、たまになくなっちゃう。それを教官に見つかっちゃった。『小沢ッ、おまえなにを考えてる?!』(来たッ!!) しようがないから、思いきって、『おふくろのことであります』と、教官は、しばらく間をおいて、『おれもそうだ!』」

「おれも、そうだ」という教官の人間的な意外性も実にいいし、「ダメ人間」の自分を思いきりさらけだし、それを笑い飛ばしている小沢もいい。

小沢の文章には、遊びがある。あるいはユーモアといつてもいい。自分を笑い飛

ばす、というゆとりこそがユーモアを生むのだ。人間のことを、自ら憐れみ、笑い、いつくしむことを知っているものの笑いをユーモアという、と定義したのは英文学者の福原麟太郎だ。

文章を書くことは、自分を見つめることだろう。自分を甘やかさず、厳しく見つめる。厳しく見つめて、そのおろかさ、だらしなさ、小物ぶりを笑う。文章修業は人間修業でもある。小沢は書く。「冷静に自分を小物と認め、しかし、いつくしんでおります」

大物礼賛、他者非難のすぎる今の世では、ユーモアはなかなか成熟しない。

●たつの・かずお

朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

